

かまはし

発行 地域力推進蒲田西地区委員会
編集 地域情報紙編集委員会

第80号



ぬくもりのある松浦さんの木工家具

西蒲田三丁目居住の松浦和美さん(67歳)をご紹介します。「ふれあいはずぬま」体育館近くに注文木工家具職人の松浦さんの仕事場「松浦家具工房」があります。松浦さんは子供の頃から森や山など自然の美しさに魅力を感じて、大学時代には仲間と「物を作り命を育てる」をテーマに塾を開き、子供達と勉強の他に小屋作り、火起こし、田畑で稲作などもしていたそうです。大学卒業後、幾つかの職業を経て、その後「一人で出来る仕事で、一本立ちしたい」との思いから品川の職業訓練校で木工技術を習得

わがまちの顔

大田区伝統工芸発展の会会員



まつورا かずみ
松浦 和美 さん

しました。この時、既に三〇歳を超えていました。

松浦さんによれば、木材には様々な性質があり、家具向きには広葉樹のケヤキ、タモ、サクラなどが使われます。また、製品の組み立てには金物は一切使わず「ホゾ組み」や「継ぎ手」という指物の伝統技術で製作します。

お子さんの通っていた保育園からの注文で箱椅子、本棚、テーブル、収納棚、屋内用滑り台など数多くの家具も製作されました。また、保護者からの注文もあり、いずれの作品も既に三〇年以上使われています。

松浦さんが作る箱椅子の特徴は、子供が小さい時は低い座面で、少し大きくなればひっくり返して座り、下にすればテーブル、横にすれば踏み台にもなる優れ物です。この製品はタモの木で製作されたそうです。また注文家具の製作にあたっては、使い勝手を追求し、

余分な装飾をせず、木そのものの美しさを求めたシンプルな「用の美」をモットーにされています。現在の仕事を始めて三〇数年、

一貫して個人で木工家具を注文製作されてきましたが、今後の目標として「今、プラスチックゴミが問題となっているが、それが開発される前は、使われる素材は木であり紙であり布であったわけですからそこに戻せないか? そのために自分に出来ることは何か? SDGs(持続可能な開発目標)の運動をアピールしたいと考えている」とおっしゃっていました。



多用途に活用できる箱椅子

松浦さんの心の奥底には、自然の素材の特質を見極めた製品作り、その製品の機能性のあくなき追求、そして色々な事象を通しての後継への伝承等を目指しているお姿が印象的でした。

今後の益々のご活躍を期待したいと思います。

(取材 森・深井・伊藤委員)

田中丘隅の多摩川永代渡船権獲得と

六郷橋架橋 ～多摩川両岸物語⑥～(最終回)

本稿は、多摩川の両岸住民の近世利害史について述べたものであり、本紙第66、68、71、73、78号にこれまでの経緯が掲載されています。ぜひご覧ください。

川崎宿と田中丘隅

これまで多摩川流域の利害の対立を見てきましたが、最後に六郷の渡しと架橋問題を書いて締めくくりとします。ここで活躍するのが田中丘隅です。田中丘隅は一六六二年(寛文二年)、武蔵国多摩郡平沢村(現在のあきる野市)の絹旅商、窪島家(喜多島家とも)の次男として出生、各地を遍歴する中で川崎宿の名主、田中家の養子となりました。

一七〇四年(宝永四年)、四五歳の時に川崎宿本陣田中家を相続し、二代目田中兵庫と称しました。当時、品川宿に次いで東海道二番目の宿であった川崎宿は、伝馬役の負担増が問題となり、抛出金の負担に悩んでいました。そこで丘隅は、宿の財政立て直しの活路を多摩川渡船に求め、渡船賃収入により伝馬役抛出金の肩代わりをさせようと図ったのです。

破損、流出を繰り返す六郷橋

六郷橋は一六〇〇年(慶長五年)に架橋されましたが、度重なる多摩川の洪水によって破損、流失を繰り返しました。そして一六八八年(貞享五年)の洪水による六郷橋の流出以降、架橋は断念され渡船場となっていました。幕府は、江戸八丁堀の岡島吉兵衛に渡船を請け負わせ、渡船経費は官費負担とし大舟九艘、小舟八艘を作らせ、以後足かけ三年の一般渡船賃を無料としました。

一六九一年(元禄四年)四月には、八幡塚町(現在の六郷神社のある東六郷を中心とした一帯)が渡船を請け負って有料となりましたが、村内に争いがあり渡船稼ぎをやめさせられてしまいました。

同年八月、幕府は渡船場の経営を江戸花方町の長右衛門と光兵衛に請け負わせました。丘隅はこの多摩川渡船の独占を狙ったのです。

一七〇九年(宝永六年)、川崎宿から申請のあった多摩川永代渡船権獲得が幕府の認められるところとなり、川崎宿の再建策が成功、財政状況も好転しました。その後

丘隅は江戸に遊学し、荻生徂徠を師として学び、成島錦江と交わりを深めました。

一七二一年(享保六年)、丘隅は農政意見書『民間省要』一七巻

を著し、これが幕府の目に留まって一七二三年(享保八年)に徳川吉宗に召し出され、三〇人扶持支配勘定並に抜擢されました。

享保の大改革を指揮

一七二五年(享保一〇年)～一七二六年にかけて、丘隅は大丸用水(稲城市)と二ヶ領用水の工事を指揮し、小杉(川崎市中原区)の瀬替えを実施しました。二ヶ領用水は近世中世の新田開発で灌漑面積が増加する一方、玉川上水の取水強化が実施されて自流量の減少を招き用水不足が顕在化し、用水内の水争いが多発していました。丘隅の改修工事はそれを解決するためのものでした。

一七二九年(享保一四年)、丘隅は多摩川、酒匂川の水利事業の功により多摩、埼玉二郡三万石の支配勘定格代官に任命されましたが、同年六七歳で病死しました。彼の墓は六郷の対岸、川崎市幸区の妙光寺にあります。



田中丘隅の墓(幸区小向 20-1 妙光寺)
(川崎市教育委員会ホームページから)

それから一五〇年近くの月日が過ぎて時代は明治と変わりました。一八七四年(明治七年)一月二〇日、八幡塚村最後の名主で代々「筏宿」を営む鈴木左内が、自費で六郷川に架橋しました。左内橋と呼ばれましたが、たびたび破損を繰り返し、修理費がかさんで金喰い橋と陰口をたたかれま

した。ところで川崎駅(明治二年から二二年まで、旧川崎宿は川崎駅と呼称しました)は、左内の架橋に異議を申し立て、紛糾しましたが、一八七八年(明治十一年)の大洪水で左内橋は流出、財産を使い果たした左内は再架橋を断念しました。流出後、川崎宿営業の渡船が復活したのです。

しかし時代の趨勢か、交通量の多い東海道は渡船の時代ではなくなっており、一八八二年（明治五年）、八幡塚村と川崎駅の有志が共同架橋しましたが、今度は、橋の名前をめぐるためてしましました。

八幡塚村側では、歴史的にも「六郷橋」とすべきだと主張しましたが、一方の川崎駅側では、「多摩川橋」を主張して互いに譲らず、その裁定を両府県庁に委ね、結局は「六郷橋」に落ち着くことになりました。

ちなみに近代的な鋼鉄橋が完成するのは、一九二五年（大正一四年）のことでした。

このように六郷渡船、橋梁架橋の歴史からも、多摩川を挟んで兩岸のライバル関係、利害抗争が繰り返されてきたことがわかります。六回にわたって多摩川兩岸物語を書いてきましたが、ここで筆をおくことにします。

最後に、この原稿を書くにあたって参考にした主な資・史料を挙げておきます。興味を持たれた方はぜひそれらもお読みいただきたいと思います。

（全六回の本原稿は多田委員が講座用に作成したものを大良委員がアレンジして共作したものです）

主な資・史料および参考文献

- 『語源大辞典』 東京堂出版 1988
- 『大田区史』中、下巻 大田区 1992、1996
- 『大田区史年表』 大田区 1979
- 『大田の史話』 大田区 1981
- 『六郷今昔小誌』平野順治著 六郷地区自治会連合会 2001
- 「近代六郷橋の変遷について」平野順治著 大田区立郷土資料館『紀要』第8号に所収 1997
- 『大田区まちなみ・まちかど遺産 六郷用水』 大田区立郷土資料館 2013
- 『新多摩川誌』 国土交通省関東地方整備局京浜工事事務所 2001
- 「多摩川の水害と堤防建設」大坪庄吾著（『史誌』4号に所収 大田区史編纂委員会 1975）
- 『玉川上水と分水』小坂克信著 新人物往来社 1989
- 『二ヶ領用水 400年～よみがえる水と緑～』 神奈川新聞社 1999
- 『多摩百年のあゆみ』 けやき出版 1993
- 『奥多摩風土記』大館勇吉著 武蔵野郷土史刊行会 2003
- 『川を知る辞典』鈴木理生著 日本実業出版 2003
- 『日蔭の村』石川達三著 新潮社 1937
- 『多摩川に生きる 横山理子著作集』 のんぶる舎 1990
- 『昭和49年（1974年）台風16号による多摩川狛江市猪方地先災害復旧記録』関東建設弘済会 2007
- パンフレット「六郷用水400」 六郷用水の会編 大田観光協会



1860年代の川崎 六郷の渡し



1910年に完成した六郷橋の親柱
（現在は六郷神社にあります）



1925年に完成した六郷橋の橋門と親柱
（現在は大田区側の橋の脇にあります）

ご存知ですか？

呑川の高濃度酸素水浄化施設

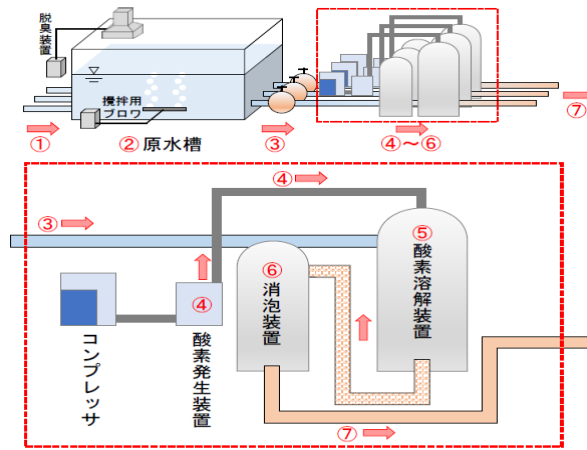
令和三年四月に運用を開始した西蒲田五丁目二番にある、高濃度酸素水浄化施設をご存知ですか。

この高濃度酸素水浄化施設は呑川の水質改善を目的とし、建設されました。大田区では、これまでも汚泥の除去作業や河床整正工事等様々な対策を講じてきましたが更なる水質改善に向けて建設された本施設の活躍に期待が膨らみます。

呑川の水質悪化のメカニズムは大雨が降ると、汚濁物が呑川に流れ込み、川底に堆積します。堆積した汚濁物質が川底の酸素を消費し、酸素が枯渇している箇所には、海水が流れ込むと、硫化物が生成され、悪臭や白濁化が発生します。つまり、川底の酸素が少ないことが、水質悪化の原因です。その問題を解決するためには、川底に酸素が豊富に含まれた水を流す必要があります。その働きが期待できるのが、高濃度酸素水浄化施設なのです。

では、高濃度酸素水浄化施設がどのようにして、水質改善をして

いくのか紹介します。(番号の説明が左記の文となります。)



- ① 呑川から原水槽に水を汲み上げます。(青巒寺前)
- ② 原水槽では、沈殿防止・悪臭防止のため、かき混ぜるためのプロワと脱臭装置を稼働。
- ③ 原水槽から三台のポンプで酸素溶解装置へと送水。
- ④ コンプレッサと酸素発生装置で高濃度の酸素(気体)を作り、酸素溶解装置へと送り込む。

- ⑤ 酸素溶解装置で効率的に空気と水を触れさせ、水中に高濃度の酸素を多く溶け込ませる。
- ⑥ 河川に放流した際の気泡化による攪拌を防ぐために、消泡装置で水中の泡を取り除く。
- ⑦ 呑川へ三地点に分けて放流する(馬引橋からJR橋)。

大田区の担当者は、本施設だけでなく、今後も呑川の水質改善に向けて様々な方法で取り組んでいきたいと話されていました。ハズが釣れていた綺麗な呑川に戻る日を待望したいと思います。(取材 事務局)

● 『かまにし17』編集委員

- 西蒲田一丁目町会 中田澄子・斉藤由美
- 西蒲田二・三丁目町会 森 俊夫
- 西蒲田四丁目町会 屋代紘征・池貝雅江
- 西蒲田女塚町会 青木 陽二
- 西蒲田六丁目自治会 伊藤多佳子・深井英明
- 蒲田西口町会 柳通勝磨
- 西蒲田七丁目御園町会 飯嶋宏之・下山恵美子

蒲田西特別出張所管内

人口	男	32,238 人
	女	29,996 人
	計	62,234 人
世帯	36,255 世帯	

令和3年 11月1日現在

- 西蒲田八丁目町会 神尾俊昭
- 御園自治会 多田鉄男
- 新蒲田一丁目自治会 伊藤孝一・山口博美
- 東矢口一丁目町会 湯澤喜久
- 雄
- 小林自治会 佐藤悦子・北村 悦子
- 安方北町会 高橋晴美・近藤邦子
- 安方南町会 大良美臣・岡 和雄
- 多摩川二丁目町会 原 哲夫・山田 勉
- 道塚自治会 横山智恵子・伴野正弘
- トミン多摩川二丁目自治会 堀江正樹・上管章仁
- 蒲田西特別出張所